1.

梟谷学園バレー部のレギュラーメンバーは皆仲が良い。
テンション高い系の木兎・木葉・小見に、落ち着いてる系の鷲尾・猿杙・赤葦、そして癒し系の尾長と、ほどよくバランスが取れている。
昼食はたいていレギュラーメンバー全員が一緒だ。場所は屋上、空き教室、中庭とまちまちではあるが、特に連絡を取り合わなくても自然と木兎のいる所に集まってくる。
未だ梅雨の明けていない七月初旬、見上げた空にはもったりと重そうな鼠色の雲が広がっている。肌に纏わりつく空気が湿り気を帯びていて、屋上ではなく、空調の効いている空き教室にすればよかったなあ……と木兎は三秒間だけ後悔した。
「赤葦は？」
屋上のフェンス際、自分を囲むメンバーの中に赤葦の姿がないことに気づき、左隣りで弁当箱を開けかけていた木葉に尋ねた。
「おまえが知らない赤葦の居場所を俺が知ってるわけないだろ」
弁当から目を離さずぞんざいに投げ返された木葉の台詞を受け、木兎は次に、右斜め前

に座っていた猿杙を見た。
「いやいやいや。木兎と木葉が知らないのに俺が知ってるわけないでしょー」
にこにこと人のよさそうな笑顔を浮かべ（しかし恐らく猿杙に笑っているつもりはない）、猿杙は首を振る。
それもそうか……と納得しかけたとき、木兎の右側に座っていた小見がおもむろに手を上げた。
「俺、知ってる」
「はあ？」
自分で訊いておきながら、自分の知らない赤葦の情報を他の誰かが知っているのが気に入らないという理不尽満載の剣呑な声を出し、ムッとした表情を隠さず小見に向けた。
「どこ」
「中庭」
「中庭ぁー？　中庭でなにしてるっての？？」
「うーん……告白？　されてるっぽい」
「え、まじ？」
「え、また？」

小見はフェンス越しに中庭を見下ろしている。木葉と猿杙がフェンスに近寄り、小見の視線を辿って中庭を見下ろした。

猿杙の「また？」に若干の引っ掛かりを覚えつつ、木兎も背後を振り返って中庭に赤葦の姿を探す。

すぐに赤葦を見つけられたのは、平均をかなり上回っている高身長のおかげ――ではないだろう。

「なあ、あれ男だよな？」

赤葦の真正面に立っている人物は、赤葦と大して体格の変わらない、赤葦と同じくダークグレーのズボンを穿いた男であった。向かい合って立つ男が二人という画は、なかなか妙なインパクトがあるものだ。

「なにかの相談？　決闘？　果たし合い？」

「告白だろ。愛の」

小見が神妙な声音で答えた。

「でもあれ、男だぞ？」

「うん、男だなぁ」

木葉は呑気な声音で木兎に相槌を打つ。

赤葦がモテることは木兎も知っている。赤葦本人から直接聞いたわけではないが、小見や木葉が「また赤葦が告られた～ズルい～」などとよく部室で愚痴っているからだ。一体どこからそういう情報を仕入れてくるのか……まったくもって謎である。

いやいや、今は小見・木葉の情報ネットワークについてはどうでもいいのだ。

「えーと……、あれって『アリ』なの？」

木兎は今まで、赤葦に告白する人物の性別について特に深く考えたことなどなかった。赤葦よりも小さくてふわっとした女の子だと、当然のように思っていた。

でも今赤葦の目の前に立って赤葦に告白をしているらしき人物は、どこからどう見ても男である。

困惑気味の木兎と違い、その場にいたメンバーたちに驚きや戸惑いの表情はない。

「アリだろ。これが初めてじゃねえもんな、赤葦が男に告られるの。実際に現場を見たのは初めてだけど」

「え?!」

小見から告げられた衝撃の事実に、木兎はもともと大きな目をさらに大きく見開いた。

しかしそれで、メンバーたちのこの落ち着いた反応も納得できた。いくらひと気のない場所で男がふたりきりで話しているのを見たとしても、普通、「告白場面」だなんて思わ

ない。赤葦が過去に何度か男からの告白を受けていることを知っていたから、皆なんの驚きも疑問もなく「告白」だと思ったのだ。

なんで俺だけ知らないんだよ――という不満混じりの問いを零す前に、木葉の発言が木兎の頬を打った。

「まあわからないでもないけどなー。赤葦ってなんかエロいし」

「はぁ？　男なんてみんなエロいもんだろ」

「エロいってそういう意味じゃねえよ。色っぽいっつーか？　色気があるってこと」

「なんだそれ……」

実は、木葉の言っていることが、まったく理解できないわけではないのだ。

赤葦の気怠げな視線だとか、汗が伝ううなじだとか、木兎の言動に呆れたように零す溜息だとか、たまーに見せる柔らかい笑みだとか――、そんなものにドキリとしてしまったことがないこともない。

ただ、認めたくないのである。

だって赤葦の「色気」を認めてしまったら、エロ動画やエロ漫画に出てくる色っぽい女の子たちを見るのと同じような目で、大勢の男たちから赤葦が見られていると認めるようなものではないか。

木兎だってクラスメイトおススメのエロい動画や雑誌を見たりする。その中に出てくる女の子たちが普段自分の脳内でどんなことをされているのか、とても人には言えない。そんな人には言えないアレコレを赤葦が誰かの脳内でされているなんて……考えただけで嫌だ。

しかし――。

嫌だと思うその一方で、「辱められる赤葦」というワードに鼓動を速めてしまう自分もいたりする……なんてことも、やっぱり人には言えないだろう。

「……止めろよ、男相手にそういうこと言うの」

「それ、男の赤葦に人一倍纏わりついてる木兎が言えることじゃなくね？」

普段からスキンシップ過多な自覚はある。そして木葉の言う通り、木兎のそばにいる時間が長い赤葦には、特に纏わりついてしまっている自覚もあるのだが。

「でも俺はホモ目的じゃねえもん！」

「はあ？　なんだよ『ホモ目的』って」

木葉が呆れたように眉根を寄せた。

とにかくダメだ。

赤葦が男に告白されるのも。赤葦がエロい目で見られるのも。

「ダメダメ、ぜったいダメ！」
「ちょ、落ち着け木兎」
「落ち着けない！　ダメなもんはダメ！」
食べかけのやきそばパンを木葉に押しつけ、木兎は勢いよく立ち上がる。メンバーたちは〇・五秒で木兎の次の行動を察知した。
ストップ木兎、待て、バカ止めろ、あとで責められるのは俺たちなんだぞこのアホフクロウ！　等々の制止と罵声を背中で跳ね返して木兎は扉へと急ぐ。
――カキュウテキスミヤカに現場へ向かえ。
少し前に流行った刑事ドラマで、偉い人がヤマ場で主人公に言う台詞だ。正確な意味はわからないが、ちょっとカッコいいから覚えている。たぶん、速攻で行け！　ってことだろう。
屋上から中庭まで自分の足なら約一分。
間に合う。大丈夫！
――俺がエロの魔の手から可愛い後輩を守ってやらねばならないのだ！
木兎は燃えていた。おそらく誰にとってもはた迷惑にしかならない使命感とやらに燃えていた。

「待ってろ赤葦ぃ～！」
可及的速やかに赤葦の元へ駆けつけるべく、木兎は階段を三段飛ばしで跳ね下りた。

※

「で、結局止めてくれる人は誰一人としていなかったわけですね」
放課後の部室。ひとりだけ練習着に着替え終わった赤葦が、制服姿のまま各々のロッカー前に立っている三年生たちをぐるりと見回した。視線に温度があるならば、今その視線を浴びた三年生たちは皆、凍傷間違いなしである。ドライアイス並みに冷え切った視線であった。
ちなみに、赤葦と三年生たちの顔を交互に見つつオロオロしていた尾長は、「先に練習を始めていなさい」という赤葦の言葉ですでに体育館に追いやられている。
俺も練習に行きたい！　という木兎の訴えは当然のことながら赤葦にスルーされた。
木兎以外のその場にいた誰もが「そもそもおまえのせいでこうなってるんだろバカ木兎」

と思っていた。……口にするだけ無駄なのでしなかったが。
「いやー……、一応止めろ待てとは言ったけど、次の瞬間にはもう木兎は校舎内に消えてたんだよね」
瞬き一回ぐらいの間でした。あっという間でした。そう、ほんともう一瞬であの巨体が消えマシタ、云々。
昼食時、自分の目の前で起こった出来事をありのままに小見が話す。しかし言い方が軽すぎて赤葦の眉間に深い皺が寄った。
木兎の背中を校舎内に見送ったあと、小見、木葉、猿杙はすぐさま視線を中庭に戻した。数十秒後、校舎脇から見慣れた銀髪頭が飛び出してきて赤葦のそばに駆け寄る。あまりに予想通りの光景で三人は同時に噴きだし、笑ってる場合じゃないだろうと鷲尾に嗜められて真顔に戻ったという次第。
「でもさー、普通に考えて俺たちが木兎を止められると思う？」
だってコレだぞ？　と木兎を指差して木葉が小見のフォローをしたが、赤葦の眉間の皺は消えない。
「全力で止めてくださいよ」
「全力でも無理だ。こんな脳筋ゴリラ」

「あ、なんか脳筋ゴリラってカッコいいな？」
木兎が能天気に口を挟む。
「おバカなゴリラってことだよ木兎」
「ひどい、さる！」
「言ったのは俺じゃなくて木葉だよ」
木兎と猿杙の遣り取りを渋い顔で眺めつつ赤葦は小さく溜息を吐く。
「……はぁ。もういいです。お時間取らせてすみませんでした」
「あーあー待て待て赤葦」
投げ遣りモード丸出しでぺこりと頭を下げ、部室を出て行こうとした赤葦を木葉が引き止めた。振り返った顔にはわかり易く「面倒くさい」が貼りついている。普段はほとんど表情筋を動かさないくせに、嫌だ面倒くさいの感情だけは、相手が先輩だろうと誰だろうとはっきり表に出すのだ。
もともと梟谷学園男子バレー部では体育会系的上下関係は厳しくない。加えて、手の掛かる末っ子大エースのお守りを二年の赤葦に丸投げしている三年生たちが、赤葦に先輩風など吹かせられるはずがなかった。というわけで多少の無礼は見逃される。
まあ、その件は今横に置いておくとして――。

男が男に告白されている場面に男が乱入とか、こんな面白いネタに噂好きな木葉が食いつかないなんてあり得ない。明らかに突っ込まれたくなさげな赤葦の渋面を、木葉はさらっと無視した。

「で？　結局木兎はなんて言ったの？」

三日月形に撓んだ細い目が、好奇心いっぱい、揶揄う気まんまん、詳細を聞くまでは逃しませんと言っている。おそらく内心は小見も同様。猿杙は……どうだろう、微妙。

赤葦は助けを求めるように『梟谷の良心』である鷲尾に視線を送ったが、鷲尾は強面に困惑の色を浮かべ、ちょこんと肩を竦めただけだ。

頼みの綱の鷲尾もアテにならないと知り、落胆からか諦めからか、赤葦の顔から一切の表情が消えた。

バレー部の部室は他の運動部よりは優遇されてそこそこの広さはあるが、身長百八十センチ超えの男が複数人いたらさすがに暑苦しく感じる。その暑苦しい空間が、むさ苦しい沈黙で満ちること数十秒。

その沈黙をあっけらかんと破ったのは当事者の木兎であった。

「俺の赤葦にちょっかいだしてんじゃねえよ――って言ってやった」

誰がおまえのだ、と突っ込む者はここにはいない。

木兎と赤葦が実際お互いの所有を主張できる仲でないことは知っているが、ただの部活の先輩後輩にしてはおかしい密度で日々接していることも同時に知っている。
ぶっちゃけなくても赤葦は木兎のお気に入りで、控えめに言っても四六時中べったりで、ホモ的な意味ではないとしても木兎は赤葦を自分のモノだと見做していて、赤葦はそれを満更でもないと思っている……っぽい。
面倒なのは嫌いだとか言っているくせに。
一番扱いが面倒くさい木兎の世話をせっせと焼いているのだから、赤葦は間違いなく木兎の『嫁』だ――というのがバレー部員の総意。
「それで？」
「そういうことなんで――って赤葦がソイツに言った」
引き続き答えたのも木兎だ。もうひとりの当事者であるはずの赤葦は、最早どうでもいいですとばかりに黙ってそっぽを向いている。
しかしその場をおさめるためとは言え「木兎の赤葦」は否定しなかったのだ。
その男は「わかった」と一言残してあっさりと立ち去ったらしい。まあ当然の成り行きではある。
普段人当たりの良い笑顔を浮かべていても、木兎は紛うことなき猛禽類だ。練習中や試

合中、なにかに集中しているときや攻撃的なとき、木兎が発する威圧感は常人の比ではない。木兎のそれを正面からまともにぶつけられ、大人しく引き下がる以外の選択肢がその男にあったはずもない。丸腰の小動物が大型の捕食者に勝てないのと同じだ。

何年何組の何君かは知らないが、同性に告白するのは相当な勇気が必要だっただろう。この結末は少々気の毒ではある。……が、『木兎光太郎のお気に入り』に恋してしまったのが不運だった、としか言えないのだ。

「……でも、大丈夫なのかなあ？」

能天気と無関心な当事者ふたりの代わりに、猿杙が心配気な声を出した。

「なにが？」

「ふられた腹いせに、自分のことは伏せて木兎と赤葦のことを変に言いふらしたりとかしないかなー？」

心配気な声音のくせに表情はにこやか（くどいようだが猿杙自身は笑っているつもりなどない）というアンバランスさが、逆に皆の不安を煽る。

確かにありえない話ではない。

それまで何某君に同情的だったメンバーの気配が少し険しいものに変わった。相変わらず呑気なのは、悪意に対して警戒心の薄い木兎だけだ。

「ま、それならそれで放っておけばいいんじゃね？」
「いや、ぜんぜんよくないでしょー」
「赤葦に告ってくる男が減りそうならいいじゃん」
男どころか女も減りそうだが、当の赤葦が気にしてなさそうなのでそこは問題ないだろう。
問題があるのは――木兎の方であった。
「だって木兎、彼女はどうすんの。変な噂が耳に入ったら嫌な気持ちになるんじゃないの？」
「あ」
猿杙に指摘されるまで、木兎はうっかり、すっかり、できたての自分の彼女の存在を忘れていたのだ。
「やべえ。どうしよう赤葦？」
大して困っても焦ってもいなさそうな声音で言って、木兎が赤葦のほうを振り返る。
「知りませんよそんなの」
その日一番の不機嫌顔で、赤葦はばっさりと斬り捨てた。

木兎光太郎の彼女になる条件はただ一つ。「バレーボール最優先」を許してくれること。

これは簡単なようで案外難しい……らしい。

部活があるから放課後一緒に帰れない。土日祝日も関係なく部活があるからデートなんかめったにできない。付き合い始めは我慢できても、段々と「バレーごときに負けている自分」に彼女たちは耐えられなくなるのだ。

しかしバレーのことを抜きにしても、「彼女はなにに於いても最優先されるべき」という考え方がそもそも木兎には理解できなかった。

彼女と過ごすより友人と遊びたいと思うときもあるし、意味のわからない話を聞き続けなければならない長電話は苦手だし、中身のないメッセージの遣り取りを延々繰り返すぐらいならその分睡眠時間を確保したいと思う。

「それはわからなくもねえけどさー」

部活開始前のストレッチ中、歴代の彼女たちに感じていた不満をなんの気なしに口にすると、木兎の背中を押しながら木葉が苦笑い混じりで言った。

「ワガママっつーか、贅沢すぎっつーか。ぶっちゃけムカつく」

とも付け加えられた。

大きく開いた脚の間、ペタリと床に着けていた上半身を起こし、背後の木葉を振り返る。

「ムカつくって、なんで？」
「おまえがめんどくせーだとか意味わかんねーって思いながら嫌々やってることをな、普通の男は喜んでやってんだよ！　っていうか、やりたくてもやれねえんだ！」
「あー、相手がいないから？」
「木兎まじムカつく！　さっさとフラれてしまえ、この脳筋ゴリラ!!」
木葉の呪詛ともとれるこの叫びに、ふたりの会話を聞いていた周囲の部員たちも全力で同意した。腹の中で。
人に好かれるのはもちろん嬉しい。キャーキャー騒がれるのも大好きだ。しかしバレーボールを初めて触った小学生の頃から今現在まで、木兎の脳内のほとんどを占めているのはバレーのことだし、バレー中心に日々の生活が回っていると言っても過言ではない。彼女に向ける意識も、割く時間も正直に言えば無い、というか惜しい。
「まあ、俺らが『木兎早くフラれろ～』って念じなくても長続きしてねえけどな、毎回」
「そうねー。なんでだろー？」
「理由、わかってねえの？」
「いや。言ってみただけ。すげーわかってる」
「フラれる原因わかってて、それを直さずすぐまた新しい彼女を作るからなー、おまえ」

彼女たちの忍耐力が保つ期間がおよそ二、三ヶ月。たとえその時の彼女とダメになっても、新しい彼女候補はすぐに現れる。バレー強豪校のエース、全国五本の指に入るスパイカーという称号は伊達じゃない。

「そこはホラ、お年頃なんでイロイロとね、彼女がいないと不便なこともあるから仕方ないよね」

繰り返すようだが、彼女たちの忍耐力が保つのはだいたい二、三ヶ月だ。長いとは言えないその恋人期間中にデートらしきことなどほとんどできないわけで。たまに会う時間ができたと思ったら、することは一つで――。これでは手が早いと思われても仕方ない。ソレ目的？　と疑われてしまうのもやはり仕方ない。

「ボクトくんサイッテ～」

「うん、否定はしない」

木兎にも最低なことを言っている自覚はある、が、健全な男子高校生としては正しく素直な反応だと思うのだ。硬い自分の右手よりもモチモチと柔らかい女のほうがいいに決まっている、恋人として。さすがにそこまで露骨な言い方はできないけれども。

体育館の二階部分にあたるギャラリースペースを見上げれば、そのモチモチが自分に向かって笑顔で手を振ってくる。時間ができたら練習を見学しに行く、と言っていたのを今

思い出した。
もし自分と木葉の会話が聞こえていたら、あのピンクの花のような可愛らしい笑顔は般若の面に変わり、足取り荒くあの場を去るのだろう……などと思いながら軽く手を振り返す。
赤葦に告白してきた男を木兎が追い払ってから約一週間。その男からの腹いせや嫌がらせを皆警戒していたが、そんな気配はまるでなく――。彼女の耳に妙な噂が入ることもなく――。今のところ『お付き合い』は順調で、あとはもう、彼女がどれだけ木兎の『バレー優先』に耐えられるかにかかっている。
また木葉から罵られそうなことを言ってしまうと、たとえ彼女が木兎のもとから去って行ったとしても特に困りはしないのだ、きっと。一瞬ショックを受けて、数分しょぼくれて、部活が始まったら赤葦にいつもより数本多めにトスを上げてもらえば概ね元通り。あとは日々の生活で（ぶっちゃけて言えばシモ方面だ）時々不便を感じるぐらい。
視線をコートフロアに戻すと、少し離れた場所で赤葦がコーチとなにやら話しているのが見えた。最近気温と湿度が高めになってきたから、外周を減らして室内での基礎トレを増やそうとか、たぶんそんなことだろう。本来は主将の仕事であるメニュー決めも、いつの間にか赤葦が担当するようになっている。監督やコーチからの連絡事項も当然のように

赤葦経由だ。プレイ以外のことに気力と時間を割かなくて済むように、と赤葦は言っていた。それなら自分が主将でいる意味は？　とほんの少し思わないでもなかったが、「アナタの役目はそれなので」と、そのとき木兎が着ていたTシャツの背中を指差されて納得した。

エースの心得Tシャツ。その名の通り『エースとしての心得』が背面に書かれている。

背中で味方を鼓舞し、どんな壁でも打ち砕き、すべてのボールを打ち切る――、シンプルだが重みあるそれらの心得は主将としての心得にも通じるでしょうと赤葦に言われてしまったら、全力でその役目を果たすしかない。

木兎の視線に気づいたのか、赤葦はコーチの手元のクリップボードに向けていた顔を上げた。そして木兎に向かって一言。声は出さずに唇だけを動かした。

読唇術など使えなくてもなにを言っているのかわかる。

「集中して」だ。木葉と喋りながらストレッチをして、ギャラリーに愛想を振り撒いたところを見ていたのだろう。

バレー部の皆が、赤葦のことを木兎の嫁だとかオカンだと揶揄と窘めを込めて呼んでいることは知っている。

しかし木兎からしてみれば、嫁もオカンも正しいようで正しくない。

赤葦は赤葦で、バレー部の副主将であり正セッターなのだけれども――、そうじゃなくて。

俺の赤葦。

やはりこれ以上にぴったりくる表現がみつからない。赤葦に告白してきた男に言った台詞は、男を追い払うためだけの方便じゃないのだ。

コーチとの遣り取りが終わったのを見計らい、赤葦を手招きする。

無表情がデフォルトの面を嫌そうに顰めながら、それでも基本従順な後輩は足早に木兎のところへと近づいてくる。

床に腰をおろしたまま赤葦に向かって両手を伸ばせば、顰め面に溜息までプラスしつつ木兎の腕を取って引いた。

「重い」

「ふふ。顔怖ぇよ、赤葦」

「誰のせいスか」

「俺？」

赤葦に悪態を吐かれてもちっとも気にならない。赤葦の言葉や態度からは、本気の侮蔑や拒絶を感じないからだ。木兎にとってはじゃれあいの一部のようになってしまう。

赤葦という男は、何事にも熱くなりそうもない涼しげな面の下に、実は熱い闘志だの強い意志だのを持っている。木兎と同じぐらいバレー馬鹿で、勝利と上達に貪欲で、一番気持ちよく木兎にスパイクを打たせてくれるセッター。

とどのつまり、木兎が楽しく充実した日々を送るために必要なのは、どう考えてもふわふわモチモチの『彼女』ではなくて――。

「赤葦がいてくれればいいんだよなぁ、俺は」

しみじみと零した本心は、まるで、愛の告白のようになってしまった。

2.

（殴ってやろうか……）

思わず物騒な感情が浮かんでしまうぐらい、目の前の男は無邪気に赤葦へと手を伸ばしてくる。拒まれるとは微塵も思っていないその無垢で残酷で甘い腕は、赤葦の体に巻きつけられた縄のようなものだった。

コート内で鳥のように高く跳躍する木兎を目にしたときから、敵と対峙し睨め付けるときの圧倒的な存在感を間近で浴びてから、自分の上げたトスが砲弾のごとく相手コートへ叩きつけられる快感を知ってから――、木兎の凄さを見せつけられるたびに増えていくその縄は、時折苦しくて時折重い。それなのに、解きたいとも解こうとも思えないのだから始末が悪い。

幼いこどもにするように、木兎の腕を引いて立ち上がらせる。これだから嫁だのオカンだの皆に言われてしまうのだと、わかってはいるけれども。

「重い」

「ふふ。顔怖ぇよ、赤葦」

「誰のせいスか」
「俺？」
悔し紛れの悪態も軽く流される。赤葦の悪態が本気の拒絶からくるものでないことを、本能的に察知しているからだろう。
蜂蜜色の大きな瞳を柔らかく撓めて、赤葦に向ける木兎の笑顔はどこまでも無邪気だ。
「赤葦がいてくれればいいんだよなぁ、俺は」
相手が赤葦でなかったら、男でなかったら、愛の告白にもとれる台詞を木兎はまるで飴玉でもくれるかのように気軽に放ってよこす。
木兎が赤葦をそばに置きたがるのは、単に自分のサポートをしてくれる副主将として、無茶な自主練に付き合ってくれるセッターとして都合がいいからだ。彼女に贈る飴玉と赤葦に渡す飴玉とでは種類が違う。
わかってはいても、胸の奥は勝手にチクチクと鈍い痛みを放つ。
「……そうですか」
答える声は我ながら素っ気無い。
木兎のそばにいるようになってから一年と少し。
木兎に対して、人には言えない後ろ暗い気持ちを抱えるようになったのも、ほぼ、それ

と同じ長さだ。
本音を渋面の下に押し込めるのは、随分と上手くなった。

その日、朝練が終了したのは、いつもより十分ほど遅い時間だった。慌てて制服に着替え、昇降口へと向かう。眠たげな顔で登校してくる生徒たちの集団に紛れ、赤葦はふあっと大きな欠伸を零した。教室に行けば眠れる……と、学生にあるまじき考えしか頭の中にない。朝が苦手な赤葦にとって朝練は苦行に等しいのだ。
靴箱を開き、自分の上履きになにやらメッセージの書かれた小さな紙が載せられているのに気づく。今までの経験上、そのメッセージはだいたい告白の呼び出しだ。
「めんどくせえ……」
思わず零した独り言は、後ろにいた同じクラスの女子にしっかり拾われてしまった。
「また告白の呼び出し？　モテモテじゃん赤葦」
赤葦の手元の紙をチラリと見て彼女はくすくすと笑う。感心しているというよりは茶化す色合いのほうが強い。

「鬱陶しいだけなんだけど」
隠さず本音を言えば、彼女の揶揄いの笑みが苦笑へと変わった。
「ひでぇ言いかた～」
「だってこっちは聞きたくもない告白を聞かされるんだよ？　それでも相手を傷つけないように気を遣いながら断わらなきゃならない面倒臭さ、わかる？」
「わかんない。そんな状況になったことないもん」
「モテないの？」
「うっわー、マジむかつく、赤葦！」
アニメやゲームのキャラクターのぬいぐるみがじゃらじゃらと吊り下がったスクールバックを容赦なく背中にぶつけられた。赤葦に告白してくるのは、たいていがバレーをしているときの赤葦しか知らない人間だ。わりとナチュラルに暴言を吐く、興味や関心がないことには他が引くほどドライ、など、素の赤葦を知るクラスメイトの対応は、こんな風にかなり雑で荒っぽい。
「なんでこんなひどい男がモテるんだろ？」
「知らないよ」
そんなの、こっちが訊きたい。

全国区のエースで存在自体が派手な木兎の傍らにいるせいで、自分も衆目に晒されがちなことは知っている。バレー強豪校の正セッターの肩書きを持っていて、同年代の男たちと比べると落ち着いて見えるらしい自分が人に好意を持たれやすいのもわかる気はする。それが嫌なわけではないのだが、同じだけの好意と関心を返せと求められるのは煩わしいし、無理だった。

赤葦の生活は部活、すなわちバレーボール中心に回っている。それ以外のことがどうでもいいとまでは言わないが、色恋の類は正直二の次三の次――。

いや。違うか。

赤葦にとって色恋の対象があまりにバレーと一体すぎて、切り離して考えることができないのだ。

要領が悪いほうでは決してない。しかし自分ではどうにもならないほどに、木兎に意識と関心を奪われている。こんなことは初めてで、赤葦自身が戸惑っているのだ。恋愛スキルが今日日の小学生にも劣っているような自分のどこがいいのか……、と本気で思ってしまう。

手の中の小さな紙切れが重い。このまま握っていれば手品のように消えてくれるのではないかと、くだらないことを願ってしまうぐらいには鬱陶しい。先日から、呼び出しを受

けたら必ず報告するようにと木兎に厳命されている。赤葦が男に告白される事実を木兎が知ったあの日からだ。

黙って済ませることもできるけど――と考えたところで、背後から太い腕が首に巻きつけられ、軽くスリーパーホールドが決まった。

「ぼ…くとさん、苦しいっス」

首に巻きついている腕の硬さと、背中に感じる体温の高さ、そして鼻孔に流れこんできた嗅ぎ慣れた匂いで自分に貼りついている人物を察した。三年の靴箱の島はかなり離れたところにあるのに。聞かれたくない話題は嗅ぎつけてくる。野生の勘か、地獄耳か、その両方か。

「お仕置きだもん」

「なんのっすか。……つかマジ苦しい」

腕をタップしたらすぐ首のホールドは解かれたが、依然木兎は赤葦から離れず、そうするのが当たり前のように赤葦の肩を抱いている。

――朝から……、勘弁してほしい。

時と場所を選ばずジャレついてくる木兎をあしらうことには慣れている。が、赤葦とて、毎度労力ゼロで平静を保てているわけではない。それなりに心拍数は上がる。

「暑い……」
「お仕置きだから」
「だからなんのっすか」
「浮気の」
「してません」
そもそも付き合ってないじゃないか、なんてまともな突っ込みをする人間は、赤葦自身を含めてこの梟谷学園には存在しなかった。目の前で木兎と赤葦の遣り取りをずっと見ていたクラスメイトも、引くどころか面白がって冗談に乗ってくる。
「木兎先輩、どんだけ赤葦好きなんすか」
「いっぱい」
吐息で飛ばせるティッシュ並みに軽くて薄っぺらい返事が癇に障る。人の気も知らないで、と悲しくもなる。けれど、いちいち相手にしていたら朝のホームルームへの遅刻は確定、精神的疲労も三割り増しだ。いつものこと、平常心、と腹の中で繰り返して、赤葦は話の流れを真顔で断ち切った。
「木兎さん、もうすぐ始業っすよ。三年の教室、ここから一番遠いじゃないですか。遅刻しますよ？」

相変わらずノリが悪いだの冷たいだの、言いたい放題言って赤葦の不機嫌度数を上げ、木兎はようやく肩を離して教室へと向かいかけた。
数メートル離れたところで広い背中がくるりとこちらを振り返る。赤葦以上に機嫌の悪そうな顔をして。
「いつ？」
「……はい？」
「その呼び出し」
「放課後、部活の前…です」
「じゃあ昼休み、部室な」
木兎が放った低く険しい声が、うなじをぞわりと粟立たせた。赤葦を見据える金色の虹彩は苛立たしげに狭まり、ぴしりと指差され、「はい」以外の言葉は口から出てこなかった。

昼食をバレー部のメンバーと一緒にとらなかった場合、または昼休みに軽い昼練をしな

かった場合、赤葦が取る行動は、だいたい図書室に行くか教室で寝ているかのどちらかだ。だからこれは意図的なものではないのだ――と、胸のうちで誰にともなく言い訳した。

昼休みが始まったばかりでひと気の少ない図書室は、肌寒いくらいに冷房が効いている。ガラス一枚隔てた向こう側は、ただ立っているだけでも汗が滲むほどの気温だろう。そんなときに好んで外に出て行く人の気が知れない、と窓の外を眺めながら思う。

学園の中庭は、普通教室棟とその対面にある特別教室棟に挟まれたところに位置している。そして特別教室棟の二階にある図書室からは、中庭の隅にある東屋がよく見えた。カップル御用達と言われているだけあって、日替わりで様々なカップルがその東屋を使う。

弁当を食べるにしろ話をするにしろ空調の効いた室内のほうが快適だと思うのだが、わざわざ東屋に行くのは一種の幸せアピールなのだろうか。

「あれ、あとどのくらい保つと思う？」

揶揄いを含んだ声は、静かな図書室内に相応しい小声だった。赤葦は東屋から視線を外さず、すぐ隣りに並んだ馴染みの気配に返事をする。

「……さあ。ただ、インハイ直前の大事なときは避けて欲しいですよね、別れるのは」

赤葦の声が東屋まで届くわけもないが、不穏な単語はいちおう最後につけた。

顔を近づけ、笑い合いながら、視線の先の男女・木兎とその彼女が話している。見るか

らに普通の友人の域を超えた距離感と雰囲気だ。木兎の恋愛事情を知らなければ、誰もあの仲睦まじげなふたりから「別れ」という単語は連想しないだろう。

「さっさと別れりゃいいのに、とか、いっそ女なんか作らなきゃいいのに、じゃねえの？」

「それは俺が口出しすることじゃないので」

「ほうほう」

赤葦の返答を素直に受け取ってくれる気はないらしい。狐目の先輩・木葉秋紀は、おどけた相槌を打って答えづらい質問を続ける。

「でもあれはわざとだったでしょ？」

「あれ？」

「この前の中庭でのアレ。なんで木兎を止めてくれなかったんだーって、俺らめっちゃ責められたけどさ。木兎に見られたら確実に大騒ぎになるってわかってただろ？」

赤葦が男から告白されている最中に木兎が割って入ってきたときの話だ。

相手から指定された場所と時間だったとは言え、いつもなら中庭なんて人目につきやすい場所で告白を受けたりしない。しかも昼休みだ。木兎に見られる可能性が高いことは承知していた。

木葉の言う通り木兎が乱入してくることも騒ぎが大きくなることも予想できていたが、

赤葦は回避の手を打たなかった。
木葉はいろいろと察しのいい男だ。適当に取り繕って答えても、きっと誤魔化されてはくれないだろう。
「どういう反応をするかなって……興味が湧いたので」
「なるほど」
今まで赤葦が女子にどれだけ告白されようと木兎がそれについて特別な反応を見せたことはない。では、相手が男ならどんな反応を見せるのかと興味が湧いたのは事実だ。何度目かの男からの告白が、それを試すのに都合のよい舞台だった。
利用する形になってしまった件の彼には申し訳ないが、実は赤葦も、その報いとも言えるダメージをしっかり負っている。
「『俺の赤葦』ってあの人よく言いますけど――」
「ん？」
「結局、普通に女が好きじゃないですか、あの人」
「あー。おっぱい大きい女の子大好きだなー」
歴代の木兎の彼女たちを思い返したのか、木葉が苦笑しながら赤葦に同意した。
「俺のこと気に入ってはいるんだろうけど、だからって、それは男が平気ってことではな

いんですよね」
　木兎が赤葦をそばに置くのは木兎のバレーに赤葦が必要だからだ。
　赤葦がどれだけ女子に告白されようと無反応だった木兎が、赤葦に近づく男を遠ざけようとしたのはつまり、木兎の中で『男同士の恋愛はあり得ないもの』と判断されているからだ。――ということが、この前の件ではっきりわかってしまった。そのぐらいで今さらダメージなど負わないと思っていたのに、胸に重石を載せられたぐらいには息苦しくて、その息苦しさは未だに鈍く続いている。
「平気って、ホモ的な意味で？」
「ホモ的な意味ってなんスか」
「木兎がそんなようなこと言ってたんだよ。なんだそれーって俺も最初は思ったけど、わりと的確じゃね？　恋愛対象かってことだろ？」
「直球……ですね」
「直球ついでに言わせてもらう。アイツあのとき、ホモ目的で赤葦にいつも纏わりついてるんじゃないって言ってたけど、ソッチの意味でもぜんぜんいけるでしょ。ていうか、どう考えてもアイツの中での優先順位はあの子よりもおまえのほうが上だろ」
　あの子、と窓の外を指差して、次に、おまえ、と赤葦を指差しながら木葉が言う。

「根拠は？」
「ない。――けど、学食の竜田揚げ定食を賭けてもいい」
「それ、俺にはなんのメリットもないですよね？」
「まあそう言うなって」
あまり人には聞かせられないような重い話題も、木葉はなんでもないことのようにサラッと話す。それが木葉の気遣いか噂好きゆえの話術かはわからないが、そのおかげで赤葦も、恨み言になってしまいそうなことを気負いなくサラリと吐き出せた。
「今日の昼休み、木兎さんに呼び出されてたんですよ俺。でもあの人、アッチに行っちゃいました」
「ありゃりゃ。まじで？」
「はい。てことで竜田揚げ定食はナシですね」
「なにやってんだよアホ木兎～」
木葉のこの言葉が聞こえたはずもないが、そのとき不意に、木兎が図書室のある特別教室棟のほうを見上げた。
「あ、アホがこっち見た」
図書室の窓際から木兎たちがいる中庭の東屋はよく見える。逆も然りで、東屋からは窓

際で中庭を見下ろしている赤葦たちがよく見える。木兎の瞳の色まで視認できるとは言えないが、お互いがどこを見ているかぐらいはわかる。確かに今、木兎は赤葦を見ている。

彼女だけがひとり東屋から普通教室棟へと戻って行く。木兎はその場で赤葦を見上げたまま、校舎とは逆のグラウンド側を指差してなにかを言っている。声は聞こえない。

――ブ・シ・ツ、だろうか？

今から部室に来いとでも言うのだろうか。

昼休みに部室と勝手に決めた呼び出しを、ついさっき、昼飯は彼女と食べると一言だけのメッセージで簡単に反故にしたくせに？

ざけんな。咄嗟に吐き出そうとした悪態は喉元で勢いを失って、口から出ていく前に消えてしまった。

隣りで一緒に木兎のジェスチャーを見ていた木葉が「ほらな」と、したり顔で赤葦の肩を叩く。

「いつでもいいぞ、竜田揚げ定食♪」

昼休みもほぼ終わりに近い時間だ。赤葦は小走りで部室棟に向かった。空調の効いていない部室棟はひどく蒸し暑い。先ほどまで図書室で冷やされていた肌に、じわじわと汗が滲んでくる。

ノックもせずに部室のドアを開けると、窓際のベンチにだらりと座った木兎の仏頂面が目に入ってきた。

木兎の表情を見て、どうすれば面倒くさい話の流れにならないかと考えてしまうのは条件反射で、赤葦の癖だ。

しかし今は赤葦が口を開く前に、木兎が表情通りの不機嫌そうな声を出した。

「男？」

ズボンの右ポケットに無造作に押し込まれたままのメモの文字を思い出す。朝に一度見ただけで名前もろくに確認しなかったが、薄桃色の紙面に並んでいた丸い文字はおそらく女のものだろう。

「女子…だと思います。というか、そんなに頻繁に男から告られたりしないですよ」

「でも実際何回かはされてるんだろ？　今回は女だったかもしれないけど、次はまた男かもしれないじゃん」

「たとえそうでも自分でちゃんと断れます」

「インハイ前になにかあったらどうするんだよ！」
苛立たしげな声が部室内の温く濁った空気を掻き混ぜた。木兎が赤葦に対してここまで強い口調で話すことが初めてで、意外なことで、うっかり流しそうになってしまったが、よくよく考えると随分なことを言われた気がする。
なにかって、それはつまり――。
木兎のしている心配がどんな類のものかに思い至り、赤葦は軽い眩暈を覚えた。
木兎の脳内では、赤葦は完全な被食者となっているらしい。自分が見知らぬ男に組み敷かれる画を想像してしまい、眉間に深い皺が寄る。
男に言い寄られることが度々あるのは事実だが、それで身の危険を心配されなくてはならないほど自分はか弱くない。万が一にでも襲い掛かられるような場面になったら、相手を蹴り飛ばしてぶちのめすぐらいのことはするつもりだし、実際できると思う。
「木兎さん、俺、身長百八十超えてます。平均より高いです。パワーだって、そりゃ木兎さんと比べたらないですけど平均以上はあります。ぶっちゃけて言ってしまうと俺もゴリラに分類される側です。なので、襲われるとかそういうことは無いと思っ――」
「甘い！」
木兎が赤葦の言葉をぴしゃりと遮った。

一瞬だけ噤んだ口から、反射的に言葉が零れ出る。
「そんなに嫌ですか？」
その問いの答えは絶対に自分を傷つけるものだと知っている。それでも確認したがるなんて俺はマゾか、と思う。
「え？」
木兎は真ん丸な目を瞬かせながら首を傾げた。ちょっとマヌケな、そのきょとんとした顔を見てほんの少しだけ胸がすく。
「俺が男と付き合ったら、嫌ですか？」